

カメ達の子供隠し

藤林真・吉田若菜（岡理大・生地）・河津勲（沖縄美ら島財団）・亀崎直樹（岡理大・生地）

Hidden strategy of turtle hatchlings to survive

By Nao FUJIBAYASHI, Wakana YOSHIDA, Isao KAWAZU and Naoki KAMEZAKI

淡水ガメ、ウミガメを問わずカメの幼体の報告は少なく、その生態は明らかにされていないといっても過言ではない。そのような状況の中で、モリイシガメの幼体は枯草などの下で、大西洋のアカウミガメ（以下、アカ）やアオウミガメ（以下、アオ）の幼体は流れ藻に隠れて漂流しているところが発見されていることから、幼体の間は何か隠れていると考えられる。そこで、淡水のミシシippアカミミガメ（以下、アカミミ）とウミガメ3種の幼体の隠伏行動について調べた。

供試個体は、アカミミ7個体（CL29–35mm）、アカ2個体（CL48, 53mm）、アオ3個体（CL55–59mm）、タイマイ（以下、タイ）3個体（CL47–48mm）である。実験水槽は縦横同じ長さの正方形（アカミミは600mm、ウミガメは1000mm）で、アカミミの実験では四隅の2ヶ所に対象物の人工葉（緑色と褐色）を、ウミガメでは1ヶ所に人工藻を配置した。そこにカメを放し、水槽上方からカメラで10分おきに撮影しカメの位置を記録し、位置は水槽を縦横3等分にした9つの区画で示した。

カメが対象物にどの程度近づくかを近接度と藻隠率で示した。近接度とは幼体がいた場所を点数化（配点：対象物を設置した区画にいた場合を2点、その外側の区画にいた場合を1点、さらにその外側の区画にいた場合を0点）して、対象物への接近の度合いを数値で示したものであり、実験ごとの総得点を個体数で割って求める。水槽内で幼体がランダムにいた場合の期待値は0.56であり、0.56より点数が高い程対象物に寄る傾向があるということになる。次に藻隠率とは幼体が対象物を設置した区画にいる割合を示したものである。

アカミミの実験で撮影された写真は298枚であった。近接度は、褐色の人工葉で 1.60 ± 0.32 、緑色で 0.40 ± 0.32 で、藻隠率は褐色で80.4%、緑色で17.5%だった。アカミミの孵化幼体の体色は緑色であり、カモフラージュのためには緑色を選択するのではないかと考えられたが、緑色より褐色の人工葉に隠れた。一方、ウミガメの実験で撮影された写真は1106枚であった。近接度は、アカ 0.84 ± 0.61 、アオ 0.82 ± 0.53 、タイ 0.53 ± 0.42 で、アカとアオに人工藻に寄る傾向がみられた。藻隠率は、アカ29.8%、アオ31.7%、タイ11.8%だった。つまり、人工藻に隠れる傾向はアオ、アカの順に強く、タイにはその性質がないことが示唆された。以上より、アカミミ、アカ、アオでは隠伏行動が見られた。種によって隠伏の程度に差は見られたが、隠伏行動はすべての種で見られ、これは幼体にとっての生存戦略であると考えられる。